

新島襄の教えを受け継いだ人—ホノム聖人 曾我部四郎のこ—

沖田 行司	同志社大学国際センター所長 同志社大学留学生別科長 同志社大学社会学部教授
講師紹介〔おきた・ゆくじ〕	〔研究テーマ〕 日本人の公共観念と人間形成に関する教育史的研究

曾我部四郎と同志社

こんにちは。只今紹介していただきました沖田でございます。タイトルの「新島襄の教えを受け継いだ人」というのは非常に漠然としたテーマでございますが、私はこの同志社を卒業したすべての人が何らかの形で新島の教えを受け継いでいると考えています。この中には徳富蘇峰をはじめ日本の歴史に名を残した有名な人がたくさんいます。またその対極に社会の片隅で黙々と働き、社会の隅を照らす光となった、聖書という地の塩となった名もなき人びとも多いわけでありませぬ。

本日はその中の一人でありませぬ曾我部四郎という人物についてお話をしたいと思ひます。この曾我部四郎という人の名前はほとんどご存知ないと思ひます。同志社の方もご存知ないと思ひます。しかし、ハワイへ、特にハワイ島へ行きますと、曾我部四郎の名前を知らない人は一人もいないというほどの人物でございます。レジメに書いておりますように、一九八四年に一人のハワイ在住のお医者さまが、Samurai Missionaryという本を書かれました。私は読んでみて非常に感動した本であります。翌年に『ホノム義塾 曾我部四郎伝』というタイトルで日本語版が出版されております。これは自家出版でありませぬ一般には出回っておりませぬが、同志社の図書館には入っておりますので、お読みいただければ一層理解していただけます。さて、徳富蘇峰の弟で小説家でありませぬ徳富蘆花が『思ひ出の記』という本を書いております。この主人公が実は曾我部四郎であります。また最近見聞書房から出ました『同志社山脈』という本の中でも曾我部四郎のことが少し解説されておりますが、どういふ人物であるかということからお話を始めたいと思ひます。

彼の生まれは一八六五（慶応元）年、明治維新の直前に直前でございます。福岡の黒田藩士の長男として生まれました。ただ長男として生まれたと書いてありますが、実は私生児でありました。私生児として生まれたために非常に暗い子ども時代を送っております。加えて、父親が武士であるということでも非常に厳しい躰を受けたわけでありませぬ。四郎は自分の子ども時代を振り返って、自分は非常に暗い寂しい厳しい環境の中で育つた、常に何か安らぎ、救いを求めていたというようなことを書いています。

十五歳になった時に突然曾我部四郎は家を出ます。今でいう家出であります。三年ほど各地を放浪し、どういふわけか愛媛県の今治にたどり着きます。今治で曾我部四郎は人生の転機となる人物と出会います。食べるものもないという放浪の中で、今治のある教会の賛美歌の声にひかれて教会に入っていきます。今治教会の牧師をしていたのが横井時雄でした。時雄は幕末の思想家であります横井小楠の息子で、同志社の社長をやつた人物でもありますが、この人が牧師として着任してました。横井時雄に救われてキリスト教信仰を学び、貧しく飢えた人びとのために働くことを決意します。自分の境遇を振り返ってみて、寂しい思いをしている、または非常に厳しい生活をしている子どもたちや、貧しい人たちに救いの手を差し伸べたい。そういう思いで、このキリスト教信仰に入っていくわけですね。

やがてこの今治教会に徳富蘆花もやってきました。ここで徳富蘆花と曾我部四郎との交流が始まるわけでありませぬ。徳富蘆花という人物は非常に面白い人物で、また後で申しあげますけれども、非常に華やかな青春時代を送ります。今治で非常に激しい恋愛をいたしまして、その側で曾我部四郎が蘆花を助けるようなことをするわけですね。横井時雄というのは非常に激しい牧師であつたこともありますが、どうもこの徳富蘆花は彼にあまりなじまない。横井時雄が京都に出張する、これは同志社に来たと思うのですが、その間に蘆花は曾我部四郎をそそのかして、自分の兄の徳富蘇峰が開いていた熊本の大江義塾に移りました。横井時雄には何も告げずに、今でいう家出をするわけでありませぬ。しかしながら熊本の大江義塾は一年足らずで一八八六（明治十九）年に閉鎖になり、残された四郎は路頭に迷います。そこで再び横井時雄に、自分はどうすればいいのだろうと相談するわけですね。当時横井時雄は同志社英学校の神学科の教授として赴任してましたが、同志社までやってくる汽車賃を送り、同志社に入学して、将来牧師になりなさいと、将来の道筋を示して曾我部四郎を迎えます。曾我部四郎は京都の同志社に参りまして、横井時雄の家に住み込みながら神学科の別科、正式に言ひますと別科神学科と言ひましたが、そこに入学します。身分は特別生と書いています。

当時、明治二十年代の日本の教育というのを、大体高等教育は英語でやつてました。英語ができない人は別科に入り、力がついてくれれば本科に移るといふことでした。初期の同志社人が国際的に活躍するのは英語で授業をやつていた影響でもあります。海老名弾正もその一人です。この別科神学科というのは、非常に伝道に強い意識をもっているのだけれども、正式の学問をしていないのいわば非エリート組に属します。エリート組は、正科の神学科に入り、そこからアメリカの東部の大学に移り、神学博士になって日本に帰ってきた後、その大学の教授になったり、有名な教会の牧師になっていきます。この別科を修了した人たちの人生を今からお話しします。

曾我部四郎が入学してから間もなく、また悪友の徳富蘆花がやってきます。彼は学問ができますので普通科に入学しましたが、この時代のことを蘆花は『黒い眼と茶色の目』という小説で書いております。黒い眼というのは実はこの当時蘆花が非常に恋慕していたある女性のごとで、茶色の目というのは新島襄のごとでした。そこで蘆花は、実は山本覚馬の娘で新島先生の奥さんにあたる八重さんの姪の久恵さんという女性と非常に激しい恋愛に落ちるわけですね。しかし、新島襄は蘆花に、今は恋愛するよりも一生懸命学業に励みなさいというアドバイスをしますが、どうも蘆花は聞かない。やがてこの恋愛は破綻します。蘆花はこの恋愛を成就するため、あちらこちらに借金をし、借金が重なってきます。そこで身辺を整理して、新島がとめるのも聞かずに、同志社をやめていきます。その後、残された借金を一生懸命働いて返したのが曾我部四郎だったので、四郎も非常に貧しかったのですが、友人のため一生懸命黙々と借金を返しました。

四郎は、実は堀貞一牧師から新島の自責の鞭事件を聞き非常に深く新島に傾倒します。将来自分が世に出たときには新島先生のような生き方をしていきたいと心に決めるわけですね。一八八〇（明治二十三）年一月二十三日に新島先生が大磯で永眠されます。新島先生が永眠された六カ月後に、どういふわけか曾我部四郎が突然同志社を退学しております。この頃は非常に同志社の学生の出入りが激しいので、四郎のことはあまり記されておられません。四郎自身が同志社にとっては、先ほど申しました非エリート組のマイナーな人物でありますから、ほとんど記録に残っていません。彼は各地を転々としながらやがて舞台はハワイに移るわけでありませぬ。

ハワイにおける日本人移民の歴史

ハワイにおける曾我部四郎のこに入る前に、少しハワイについてお話ししておきたいと思ひます。日本からハワイへ人びとが移民したのはいつごろだと思ひますか。実は明治維新なんですね。徳川幕府の末期にハワイ王国の代理人がハワイの出稼ぎ移民を募集し、大体一五〇人ぐらゐの人びとが集まりました。いざ横浜から出航というときに、明治維新になって維新政府はこれを許可しませんでした。しかし、彼らはそれを無視して太平洋を渡りハワイに行つております。当時の移民というのは非常に悲惨な生活であつたようですね。西部のカウボーイあがりか鞭をもって働かせるという、まるで奴隷労働のような状態にありました。そこで移民の中から日本政府に嘆願書を出して救ってほしいという申し入れがあり、明治二年に四十名足らずが日本に帰つてきております。その後ハワイに行く移民は途絶えております。

しかしながら十年位後、一八八二（明治十四）年に、皆さんご存知のカラカウア王が世界周遊旅行に出発します。その一番初めの寄港地に日本を選んでおります。これには理由があるのです。ハワイというのは太平洋の真ん中に浮かぶ島で、南アジアそのものも非常に近いので、今でもそうですが軍事的に重要な拠点であります。ロシアとかフランスとか、ドイツ、イギリスとかみんなこぞつてこのハワイを欲しいと狙つてました。あるときにはロシアが入つてロシアの国旗を掲げる。国際世論が起つてロシアが撤退する。今度はイギリスが入つて国旗をあげ、また国際世論が起つて撤退するといふ不安定な状態にありました。やがてアメリカの資本家がハワイで製糖工場を経営してほぼハワイの経済を握るようになります。そういう意味で当時のカラカウア大王の周辺の重要な役職者はほとんど白人で、彼と同行したのもすべて白人の大臣でありました。

三月十一日の夜、カラカウア大王は日本人通訳官を一人だけ連れ、明治天皇と会つています。赤坂の仮御所で会つたことが『明治天皇紀』に書かれていますが、ここでカラカウア大王は三つの申し入れをしています。

一つは当時ハワイ王国は西洋列強国の圧力の中に存在し、やがて西洋列強国の植民地にされることは時間の問題である。それを牽制する狙いもあつて、日本を中心としたアジア諸国同盟を作りたいという申し出でありました。二つ目は当時山階宮定慶殿下（後の伏見宮）とカイウラニ王女との結婚です。ハワイ王国の王女と日本の皇族の結婚であります。そうすることによってハワイ王国と日本との強い絆を作つていこうといふことでした。そして三つ目は労働者の派遣であります。ハワイはもともと太平洋の真ん中に浮かぶ地域ですから、欧米の文化、人とともに、彼らが持ちこんだ今でいうウィルス性感冒が蔓延して人口が激減していく状態になります。そこで労働者を派遣してほしいという申し入れをします。

一番目のアジア同盟に関しては、日本はこういう条約を結ぶと、欧米と国際戦争になってしまう、まだまだ日本には国際戦争をやるだけの国力はないといふことで、山県有朋が拒否します。二番目の山階宮定慶殿下とカイウラニ王女との婚約は、一度皇室会議で成立し、ぜひ日本の皇室をハワイに送ろうといふことになります。しかしながらこれも山県有朋の強い反対にあい、つぶされてしまいます。三番目の労働者を派遣するといふことだけが実践されます。これが日本政府と当時のハワイ王国との間で結ばれた官約移民なのです。現在ハワイはアメリカの五十番目の州ですが、当時は独立国でありました。そこで契約を結びまして大体三年間の契約でハワイに行きます。一八八五年から一八九四年まで計二十六回大体三万

人位の日本人がハワイに渡っておりまして、一生懸命働いて三年間お金を貯め、当時のドルと日本の円の差からみますと非常にお金持ちになって帰り、故郷へ錦を飾るとというのが目的であります。

ハワイに行く人たちは、日本では十分労働できないということで、田畑を売り払ったり、または借金して渡航費を集めます。ところが実際にハワイに行きますと思うようにお金がたまらない。お酒を飲んだり、賭博をしたりとずさんだ生活を過す人も少なくありませんでした。またハワイに行くときに男女の比率が非常に悪かったので、女性が少ないこともあって風紀が乱れるということもありました。奥さんを借金の肩代わりにしてしまうということもあったようです。そういうときに一番苦しむのは子どもや女性など社会的に弱い立場にあった人びとです。子どもと女性は非常に虐げられていて、とりわけ子どもは売られたり、捨てられたりという状況が日常的にありました。

ハワイ伝道と曾我部四郎

そういう状況を見ましてプロテスタントの中でもメソジスト派の牧師たちが何とかこの日本人移民の貧しい虐げられた人々を救いたいと伝道に取り掛かります。その伝道に非常に力を入れたのがO・ギュリックであります。この人はハワイ伝道会社の日本伝道の指導者で、岡部次郎という人物をハワイに派遣します。岡部次郎という人はどういう人であるかと言うと、高橋是清についてアメリカに渡って、オペリン大学を卒業して一八八九年に伝道を開始します。三万人ほどの日本人がいる中で一人が走り回っても限界があるということで、岡部次郎は一八九二年に同志社に参りまして、ハワイでの現状を話し、志のある人たちが何とか恵まれない人びとに伝道をし、希望の光を与えてくれないかと伝道者を募りました。これに応じたのが奥亀太郎、江口一民、神田重秀、江上源三という人びとです。この人たちはいずれもハワイに伝道に行った人びとです。奥亀太郎は短期間で帰っております。江口一民というのは熊本洋学校で不敬事件を起こしてハワイ伝道を志し、 Maui島で一時伝道していたのでありますが、材木会社や新聞社を経て後にアル中で亡くなっております。神田重秀だけは日本語学校を作っております。

伝道する日本人が足りないということで、翌年岡部次郎は再び同志社に来て伝道者を募ります。そのころ曾我部四郎は、どうも岡山の方を転々としていたようであります。海老名弾正からハワイ伝道の話聞きましてこれに参加するために、曾我部四郎、奥村多喜衛らが、日清戦争の直前に横浜からハワイに行っています。奥村多喜衛はハワイの日本人社会で非常に有名で、今でもハワイに行きますと、マキキ聖城キリスト教会というのがあります。皆さんも一度行かれたらよく分かるでしょうが、ハワイのマキキ地区に高知城の天守閣を模した教会が今でも残っております。これは実は奥村多喜衛が作った教会であります。また奥村は本格的な日本人学校を創設します。当時の子どもたちは本当に放置されていて、日本語、英語、当時のハワイ語が混合されていました。たとえばある時に奥村多喜衛が街を歩いていて、一人の女の子に君のお母さんはどうしたのかと聞いたとき「ミー、ママ、ハナハナ、よう来ない」と言います。「ミー」というのは私の、「ママ」はお母さん、「ハナハナ」はハワイ語で労働。「よう来ない」は日本語です。こういう言葉で子どもたちが話していたのです。やがてこの子どもたちが日本へ帰った時にどうなるだろうかということで彼は日本人学校を作ることを決意します。後に、彼は日本人移民社会のリーダー的な役割を果たしました。

一方曾我部四郎はどこへ行ったかと言うとハワイ島です。ホノルルというのはオアフ島にあります。そのホノルルからハワイ島という一番大きい島に船で一昼夜かけてまいります。ハワイ島の中心がヒロであります。そこから二時間馬車に揺られていったところがホノムという陸の孤島のようなところであります。彼はここに居を構えたのです。伝道というのは名ばかりで聴衆を集めて神の教えを説くというようなこととはほど遠い仕事が待っていました。人びとは生活できるか、食べられるか、食べられないかというような状態に置かれていたのです。

そこで一番初めにやったことは、放置された子どもまたは売り飛ばされて路頭に迷う女性、そういう人々を保護することでありました。二つ目は当時弱い移民労働者の権利、または人権を守ることであり、おおよそ生活全般にわたる相談を受けることでありました。おそらくこのころの伝道者の仕事というのは非常に大変だったと思います。落ち着いて説教をするような時間はなかったと言っています。当時のサトウキビ耕地で朝五時から夜遅くまで男も女も働き、住まいは本当に粗末で人間の住むようなものではなかったようです。私も当時の写真を見るのですが、当時の人びとの言葉によれば、まるで豚小屋のようで、人間の住むようなところではなかったようです。そういうところで一生懸命働いて子どもを育てているわけです。苦しさから逃れるために賭博であるとか売春であるとか、アルコール中毒とか、そういうことが蔓延するわけでありました。

一方女性が少ないので呼び寄せ結婚をします。写真を送って日本からお嫁さんを迎えるのです。今でもお見合い写真というのは、写真を見てお見合いの場でお見合いをするわけですが、当時はお見合いできません。写真だけだったのです。だから若いときの写真が送られてきて、それを見て素晴らしい人だ、ジェントルマンだと思って、行ったところがおじいちゃんであったというようなことが間々あったようです。若い女性は一度ハワイに渡ってしまえば、そう容易には帰れません。そういう中で女性も悲惨な生活を強いられます。南国の楽園、別天地に行くのだと聞かされたところから、朝早くから夜遅くまで、サトウキビ工場で厳しい労働をさせられる。子どもはどうかと言いますと、ちゃんとした家庭で育った子どももいたわけですが、多くの子どもたちはほったらかしも同然でありました。四郎は、当時のサトウキビ工場の資本家たちに寄付金を集めて回り、そうした子どもを収容する寄宿舎を作ります。そこで日本語と同時に聖書の教えを伝えます。これが後のホノム義塾であります。

曾我部四郎はホノムに来ましてから、五十数年住むのですが、ホノムを出たのは二回だけです。一回目はホノルルに行きました。もう一回は日本に帰っているんです。何のために日本に帰っているのかということ調べてみると、実は幼稚園を作りたいということで、新しくホノム学校に必要な教育資料であるとか道具を購入したいということを目名にして一八九七年に日本に帰っております。しかしながら本当の目的はお嫁さんを探すことであつたようです。お嫁さんを探すといっても大体見当をつけているのです。四郎の親友で亡くなった中川隆一郎牧師の奥さんだった人で中川しかという人です。当時は京都看病婦学校を卒業して、同志社病院の看護婦長として勤務していました。この人は非常にしっかりした女性で、こういう女性を迎えて子どもたちの世話をしたいということで、結婚を申し込むわけですが、なかなかこの結婚は大変だったようです。

曾我部四郎は武士的な精神を持っていて、女性に頭を下げたりということのない人物ですけれども、意を決して畳に頭を擦り付け何週間も通ったようです。これはなぜかと言うと、中川しかという女性は非常に魅力的な人ではあったが、やはりホノムの子どもたちの世話をどうするのか、そこに非常に大きなポイントがあったと思います。四郎はハワイのホノムに残された子どもたちの現状を切々と説きます。ハワイへ行っても楽な生活はできない。苦しい生活ではあるけれども、ともに子どもたちや女性のために働いてほしいと切々と訴えます。そういうところに心を打たれて、しかさんは結婚を受け入れます。二人は京都教会でささやかな式を挙げてハワイに帰ります。それから二十三年間、このしかさんは一九二〇年に亡くなるまで、ホノムで四郎を助けて貧しい人びとのために献身的な人生を送っております。

「ホノム義塾」の働き

話を元に戻しますが、やがて一八九七年にホノム砂糖会社の提供した土地に、製糖会社とハワイ伝道会社、民間の献金により「ホノム（保能武）義塾（Honomu Boarding School）」を作り、十七名の貧しい子どもたちを収容しながらこの学校がスタートいたします。ホノムは地名であります。四郎は五十年間ほどハワイに住みついたわけですが、英語が非常に苦手であったようで、文法や発音もマスターすることができずに公開の講演でも一切英語では話ができなかったようです。大体向こうに三〜四年行った人は英語を話したのですが、彼は変な英語が本当に苦手だったでしょう。私は現在国際センター所長をしていますが、これに関して、こういう人もいたのかということではございまして。

話は変わりますが、キリスト教の教育を通して日本人移民社会の道徳や風俗を改善することによって、労働意欲が向上するという考え方を当時の資本家も持っていたようです。曾我部四郎の構想をサポートする当時の白人の資本家がたくさんいました。一方しかさんは「おぼさん」と呼ばれて恵まれない女性や子どもたちを実の子どものように慈しんで育てたということでもあります。後に曾我部四郎の妹のひささんもハワイにやってきまして、寮の子どもの面倒を見るようになります。四郎のこのホノム義塾はプランテーションの白人経営者たちから非常に高い評価を得ます。なぜかと言いますと、一生懸命働くというよりも生活そのものをどのように立て直すのか、そういうことを説いて回るのでね。生活の基盤をしっかり作っていくことによって、子どもの教育もしっかりやっていくようになり、やがて働く希望も出てくるだろうということで、プランテーションの経営者にとっては非常にありがたい存在でもありました。そこで一九〇〇年には一・五エーカーの土地を寄付して、新しい寄宿舎もできたわけです。新しい写真を見ますと非常に立派な寄宿舎です。子どもたちも制服を完全に洋服に代えて登校するのです。野球のユニホームも白人たちが提供です。そういう意味では当時としてはかなりモダンな学校だったようであります。

このホノム義塾の教育方針ですが、曾我部四郎はこういう方針で子どもを育てたのかと言いますと、すべての子どもたちに労働を分担させるということでした。おそらく四郎のものの考え方というのは頭だけの教育ではなくて、体を使ってものを学んでいくということだろうと思います。人びとに奉仕する精神が教育の基本にあるのだということで、労働を分担するわけです。皿洗いであるとか、薪割りとか風呂炊きであるとか、どんな子どもにも労働を分担していく。四郎は人格形成というものが日常的な労働を通してしかできないという信念を持っていたのです。これは教育学でも労作教育といって一時非常にはやったのでありますが、今ではほとんど主張されていないです。家でも子どもを働かさず。今は学校の掃除もやりますと清掃会社の人がやってくれる。そういう中で自分たちが掃除をし、生活をしていくことは自立の精神を養っていくことに通じるのです。

四郎の教育の根底にももちろんキリスト教があったことは言うまでもありませんが、彼は武士道というものも日本人の人格を形成する上で非常に重要であると考えていたようです。彼の説教を見ましても、聖書ばかりでなく、儒教や仏教や中国・日本の古典の引用が非常に多いのです。彼の書いたものを見ますと、「真理は一つである。真理は聖書に書かれてある。しかし仏陀も真理である。孔子も真理である。だから一生懸命聖書に仕えることは、仏陀に仕えることであり、孔子に仕えることである」。こういうものの考え方は神学を研究している方からみればあいまいな、未熟なキリスト教信仰であると言います。それでは当時の日本人移民がなぜ四郎の説教に聞き入ったのかと言うと、その説教が自分たちの持っている教養とか自分たちの持っている日常的な知識とつながってくるものであったからだろうと思います。全く別世界の聖書を説くのではなくて、偉人としての日本人たちの伝記としてのお話であるとか、日本神話の天照大神の神話から聖書に引き込んでいくと具体的に理解しやすかった、というふうに当時の人たちが書いています。一言で言いますと他宗教に対する寛大さがあったということでしょう。これは禅宗のお寺の建設の際にも顕著に示されております。

移民の人たちは日本人でありますからやはり仏教を信じる人も多く、日本人移民社会の世話人が曾我部四郎に仏教の寺院を作る建設メンバーに入ってほしいと依頼します。彼は了承して創立者に名を連ねております。また自分がハワイに来て伝道した際の経験を禅宗のお坊さんに伝えていきます。やがて大正寺という、今でも残っておりますが、ヒロの禅宗の寺院建

立のオープニング・セレモニーで講演をしております。これはおそらく四郎の人格と言いますか、彼の人生観にも非常に大きく影響するところでもあります。

他宗教に対する寛容さというのは他者に対する寛容さにも繋がってくると思いますが、彼は自分自身に対しては非常に厳しかったようです。伝道者と牧師は違い、伝道者というのは洗礼を授けることはできません。四郎は一伝道者だったので、多くの人たちが牧師の免許を取りなさい、按手礼を受けなさいといったけれど長い間、一伝道者としての地位に甘んじたのであります。しかし大正四（一九一五）年、信者たちに促されて牧師免許を取っております。これも彼の反骨精神の生き方であって、自分はエリートではない、牧師として説教するよりも、聖書の言葉を伝え人びととともに生きるのだという思いでしょう。これはおそらく伝道者の原点であると思うのですが、そういう生き方をした人であります。先ほど彼の教育の原理のお話をしましたが、もう一つ、教育方針ということで、ホノム義塾を創設する時に、彼はこういう演説をやっているのです。

曾我部四郎の教育方針

私の教育方針は京都の新島襄の教育方針である。「自由教育・自治教会・両者並行・邦家万歳」。この言葉を皆さん聞かれたことがあるでしょうか。これは新島先生が亡くなり、若王子にご遺体を運ぶときに、勝海舟が餞に送った言葉です。「自由教育」、「自治教会」というこの二つの言葉に対して、四郎は、「わが言動に対する主張、わが教育上における方針、まことにこの二句によりきたりなり」と書き記しています。「私は新島襄が亡くなるときに、ずーっとお墓に上がっていく幟を見て、この二つが自分の教育方針であり、また伝道の柱であると思った」と述べています。

自由教育というのは、国家の権威や権力から自立して、良心を主体とした人間教育を実践すること。世の中の大きな流れはどうであろうが、同志社の教育は自由教育である。自由教育というのはなんでもやればよいという自由じゃないですね。実はこの自由教育の自由とは、心の欲望というか妬みとか恨みからも自由になるということです。人間が本当に自由になるということは、自分たちの社会圏だけでなく、神の言葉を知り神の真理を知って初めて自由になることです。自分の内にある偏見であるとか、そういうことから自由になるということです。どうも最近自由教育の理解が十分されていないようですが、実は何をしても自由なのだという意味ではないのです。新島襄は自由民権運動に対して非常に厳しい批判をしております。本当の自由というのは、人間の良心、心の自由である。心の自由を知ろうと思えば神の真理を知らなければならない。そういうことにつながってくるわけですが、そういうことが四郎の教育方針としてあった。

二つ目は自治教会です。これは大きな組織の規制を受けずに自らの信仰の力で教会を運営することです。先ほど言いましたように、按手礼、牧師の資格の免許をとらずに長い間一伝道者に甘んじて黙々と働いたのもこういう考え方と無関係ではありません。こういう意味で新島が同志社に託した念願を曾我部四郎が受け継いでいると思います。

こういう形で彼はホノム義塾を運営するわけですが、一九二〇年代からハワイにおいては日米戦争の可能性について議論されるようになってまいります。当時ハワイはアメリカの準州で、州知事はアメリカ合衆国大統領の任命でした。そういう意味で、選挙権を持った日系人が増えてくると、アメリカとしては非常に困った状態になります。やがて日本が力を持つてくれば、日米戦争が起こるのではないかと恐れたわけです。

そういう状況の中でハワイの新聞記者がやってまいりまして、四郎にインタビューをします。記者は、もし日米に戦争が起こったらあなたはどうしますかという質問をします。それに対し、曾我部四郎は面白い返答をしております。面白いというのは興味深いということでもあります。「私の門下生をすべてホノム義塾に集めます。ハワイ生まれのアメリカ市民は右に、日本生まれの日本人は左に座らせます。そして次のように言います。ハワイに生まれた者は生まれながらに米国民である。義まさに米国のために戦え。そして、振り返って日本人に向かっては、君たちは大日本帝国の忠勇なる人民である。『一旦緩急あれば義勇公に奉じ、以て天壤無窮の皇運を扶翼すべし』、つまり日本国家のために忠節を尽くせ」と、そう言ったのであります。これには記者はびっくりいたします。アメリカの白人の支持を受けてキリスト教を布教しているので、当然、アメリカのために戦えと言うだろうと思っていたのですが、四郎はそうは言わなかった。これはいったい何を意味するかと言いますと、つまり国家を超えた次元の教育を信条としていたということです。戦争というものは一時的なもので、やがて戦争が終わったときに両国民は仲良くなるんだと。一時の戦争でお互いに憎しんだり、アメリカはだめだ、日本はだめだというようなことはやめておこうと。自分の信ずる、所属する国に従って自分は市民としての義務を果たすだけである。こういう四郎の言葉がハワイの新聞で紹介されますと、大きな議論を引き起こします。これは危ない人間ではないのかと。しかし、四郎の意図するところは教育というものは普遍的である、神の教えは普遍的であるということであり、一時、国家というものに繋がっていくのだけれども、やがて国家の問題が解決されたときには両国民は互いに相互理解を行っていくのだ、ということに彼は訴えたかったのだと思います。

四郎は日系二世を、アメリカの古い習慣から脱した真正の自由の子であり、人種や階級などの地球のあらゆる差別思想を打破する可能性を持っているととらえ、アメリカ人、日本人という固定した考え方はやめておこうと言っています。自分がここで寄宿して教育している子どもたちは、人種や階級などの地球のあらゆる差別、偏見をなくす可能性を秘めた子どもたちである。この子どもたちに理想的な教育をしたいという希望を持っていました。四郎の理想というのは、アメリカ国家からの自由、自立でもあったわけでありました。しかし、日米開戦と同時にこういうものの考え方が非常に危険視され、四郎はFBIの捜査を受け、ホノム義塾は解散を余儀なくされます。

曾我部四郎の足跡

四郎はのちにホノムの聖人と呼ばれるようになります。なぜホノムの聖人かということですが、それは献身的にホノムの人たちに貢献したからであります。日本でも近江聖人という言葉があります。中江藤樹のことを近江聖人というのですが、「聖人」というのはおそらくキリスト教的な意味というよりも、むしろ人びとが曾我部四郎によって非常に救いを得たということ、ホノム地方の日本人たちが新しい生活の基盤を作るうえで、彼が非常に大きな力を与えてくれたということだと思えます。

やがて一九四九年、戦後間もなくありますが、彼は八十五歳の人生を閉じております。死ぬ少し前、曾我部四郎は自分の身の回りの人に、四郎が書いたすべてのものを集めさせ、日記も手紙も、生きていた証を全部燃やします。これは一体何を意味するのでしょうか。私が今ここに持ってきています『もう三千ドル』という本があります。ホノム義塾を建設するためにもう三千ドル必要であるということで、この本を出して本の収益を充てたのであります。この本には原田助であるとか、いろんな人たちが序を書いてあります。日本にはこれがほとんど残っていません。先ほど挙げましたSamurai Missionaryも実は中野次郎というハワイ生まれの二世が、おじいさん、おばあさんたちを訪ね歩いた聞き語りであります。

この『もう三千ドル』とハワイに残っている邦字新聞、英字新聞に曾我部四郎の記事を寄稿していますが、私たちはその記事から曾我部四郎の足跡を理解することができます。ホノム義塾で救われた人たちは、八十歳、九十歳を越えてしまい、四郎の存在はほぼホノムから忘れ去られようとしています。同志社からは完全に曾我部四郎の名前は消え去ってしまっています。彼は、ホノルルで活躍した牧師であるとか、アメリカ東部の神学校を卒業してこの同志社の神学教授だった人であるとか、同志社のエリートとは異なって、ハワイ島のホノムという片隅で生涯恵まれないう子どもたちの教育に捧げ、そして名も知れずに去っていった人であります。こういう新島の教えを受け継いだ人たちが存在していたということは将来の同志社を考える上において心にとどめておくべきであろうと思います。われわれはややもすると、同志社出身の有名人に目が行きがちですが、名もなき多くの新島の教え子たちがこの日本だけでなく、世界で活躍しているということ、今日はご披露させていただきました。どうもご清聴ありがとうございました。

二〇〇五年十一月九日 同志社スピリット・ウィーク「講演」記録